

## ダニエル書 - 第七十七号

預言的な類比の解明：1863年のラオデキヤ的アドベンティズムと聖書的類型論

Jeff Pippenger

2024-02-10

1863年のラオデキヤ的なアドベンティズムの反逆は、エリコの再建に対して宣告された呪いによって象徴されてきた。

その時、ヨシュアは彼らに厳粛に誓わせて言った。「主の前に、この町エリコを建てようとして立ち上がる者は呪われよ。彼は長子をもってその基を据え、末の子をもってその門を建ててであろう。」ヨシュア記 6:26

1863年のラオデキヤ的アドベンチズムの反逆は、建てる者たちが隅のかしら石を捨てたという型で表されてきた。

イエスは彼らに言われた、「あなたがたは、聖書に『家を建てる者たちが捨てた石が、隅の要の石となった。これは主のなさったことで、私たちの目には驚くべきことではないか』と書いてあるのを、読んだことがないのか。だから、あなたがたに言う。神の国はあなたがたから取り上げられ、その実を結ぶ民に与えられる。」マタイ 21:42、43

1863年のラオデキヤ的アドベンティズムの反逆は、アロンの金の子牛によって象徴されてきた。

彼らが私にこう言ったからだ。「私たちの先に立って行く神々を作ってください。というのは、あのモーセ、すなわち私たちをエジプトの地から導き上ったあの人がどうなってしまったのか、私たちには分からないのです。」そこで私は彼らに言った。「だれでも金を持っている者は、それをはずしなさい。」すると彼らはそれを私に渡した。私はそれを火に投げ入れると、この子牛が出てきたのだ。そしてモーセは民が裸になっているのを見た（アロンが彼らを裸にし、敵の前で彼らに恥をかかせていたからである）。出エジプト記 32:23-25。

1863年のラオデキヤ的アドベンチズムの反逆は、ヤロブアムの二頭の金の子牛によって象徴されてきた。

もしこの民がエルサレムの主の家にいけにえをささげに上って行くなら、この民の心は再び自分たちの主、すなわちユダの王レハブアムに向き、彼らは私を殺して、再びユダの王レハブアムのもとへ帰ってしまうだろう。そこで王は相談し、金の子牛の像を二つ作って、民に言った。「あなたがたがエルサレムへ上って行くのは遠すぎる。イスラエルよ、見よ、これがあなたをエジプトの地から導き出したあなたの神々だ。」そして彼は一つをベテルに据え、もう一つをダンに据えた。列王記上 12:27-29。

1863年のラオデキヤ的なアドベンチズムの反逆は、ろばと獅子の間で死んだユダから来た預言者によって予表されてきた。

こうして、彼がパンを食べ、飲んだ後、彼は彼のためにろばに鞍をつけた。すなわち、彼が連れ戻した預言者のためであった。彼が出て行くと、道で一頭の獅子が彼に出会い、彼を殺した。彼の死体は道に投げ出され、ろばはそのそばに立ち、獅子もまたその死体のそばに立っていた。列王記上 13:23、24。

1863年のラオデキア的なアドベンチズムの反逆は、古代イスラエルが荒野での放浪を始めることとなった第十の試練によって象徴されてきた。

しかし、わたしは生きている。まことに、全地は主の栄光で満たされる。わたしの栄光と、わたしがエジプトと荒野で行った奇跡を見ながら、今や十度もわたしを試み、わたしの声に聞き従わなかったあの者たちは、まことに、わたしが彼らの先祖に誓った地を見ることはない。わたしを怒らせた者のうち、だれひとりそれを見ることはない。しかし、わたしのしもべカレブは、彼のうちに別の霊があり、わたしに従い通したので、彼が行ったその地に、わたしは彼を導き入れる。その子孫はそれを所有する。民数記 14:21-23

使徒パウロは教えた：

これらのことは皆、彼らに起こったのは、私たちに対する模範としてであり、また、それらは、世の終わりが臨んでいる私たちへの戒めとして書き記されたのです。コリント人への第一の手紙 10章11節。

その預言的原則について論評しながら、ホワイ夫人は次のように述べた：

「古代の預言者たちは、おのおの自分たちの時代のためというよりも、むしろ私たちの時代のために語ったのであり、それゆえ彼らの預言は私たちに対して効力を有している。『これらの事は皆、彼らに対する実例として起こり、そして世の終りに臨んでいる私たちへの訓戒として書かれたのである。』コリント人への第一の手紙 10:11。『彼らは、自分たちのためではなく、あなたがたのためにそれらのことに仕えていたのであって、そのことは今や、天から遣わされた聖霊によってあなたがたに福音を宣べ伝えた人々を通して、あなたがたに告げ知らされたのである。これらのことは、御使いたちも見入りたいたいと願っている。』ペテロの第一の手紙 1:12....」

「聖書は、この最後の世代のために、その宝を蓄え、ひとまとめに束ねてきた。旧約聖書の歴史におけるすべての偉大な出来事と厳粛な事柄は、この終わりの時代の教会において、これまでも、そして今もなお、繰り返されている。」『セレクトッド・メッセージズ』第3巻、338、339頁。

イザヤによれば、後の雨のメッセージはメッセージであり、彼は悪しき者がそれを聞くのを拒むと明言し、そのメッセージを「行に行を重ねて」と表現している。

「彼はだれに知識を教えようとするのか。だれに教理を悟らせようとするのか。乳を離れた者たち、乳房を離れた者たちである。まことに、戒めに戒め、戒めに戒め、規定に規定、規定に規定、ここに少し、あそこに少し、である。まことに、どもる唇と異国の舌とをもって、彼はこの民に語られる。この民に彼は言われた、『これこそ疲れた者を休ませる安息であり、これこそ憩いである』と。しかし、彼らは聞こうとしなかった。それゆえ、主のことばは彼らにとって、戒めに戒め、戒めに戒め、規定に

規定、規定に規定、ここに少し、あそこに少し、となり、彼らは行って後ろに倒れ、打ち砕かれ、罨にかかり、捕えられるのである。イザヤ 28:9-13」

私たちが今しがた特定した六つの線のうち——もちろん、ここで挙げていないものも他にありますが——、一つは1863年を、荒野の放浪へと至らせた漸進的な試練の終わりとして強調しています。二つは、かつての契約の民が退けられ、新たな選民に置き換えられることを強調しています。一つは、神の呪いのもとで破壊されたまま、廃墟として放置しておくべきものを再建したことに対する呪いを示し、もう一つは、行くことを禁じられていた場所に戻ることに示します。さらに二つは、ハバククの二枚の板を表していた十戒の二枚の石板の模造品の実例を示しています。

アロンとヤロブアムの金の子牛は、偽の「妬みの像」を象徴しており、その像は偽の1863年の図表を表している。二つを合わせて考えると、アロンとヤロブアムという二人の証人は、ハバククの二つの板が一つの板を表していることを教えている。ちょうど、十戒の二枚の石板が神の一つの律法を表しているのと同じである。一緒にされると、それらは一つの象徴となるが、それは二つが合わさって成り立っている。神の律法の二枚の板に見られるのと同じ預言的力学がハバククの二つの板にも存在し、アロンとヤロブアムの偽物は共に、その預言的現象を取り扱っている。

アドベンチズムの第一世代は、エゼキエル書8章の「ねたみを引き起こす像」によって象徴されてきた。エゼキエル書8章で、第六年の第六の月の五日に始まる幻は9章へと続き、そこで十四万四千人の封印が表されている。9章に描かれたその封印の光景について述べる際、ホワイト夫人は、神が不従順な者を第三代、第四代において裁かれることを示す、神のご性質の特徴を取り上げる。それゆえ、彼女は、アロンやヤロブアムの金の子牛のような偶像礼拝を禁じる第二の戒めに直接結び付く真理を取り入れている。

「そして彼は、亜麻布をまとい、腰に書記の墨つぼを帯びた男を呼んだ。主は彼に言われた、『町のただ中、エルサレムのただ中を通して行き、その中で行われているすべての忌むべきことのために嘆き叫んでいる人々の額に印をつけよ。』主はまた、私の聞いているところで、ほかの者たちにも言われた、『彼のあとに続いて町を通り、打て。容赦するな、憐れむな。老いも若きも、娘も幼子も女たちも、ことごとく殺せ。ただし、印のある者には近づくな。わたしの聖所から始めよ。』そこで彼らは、家の前にいた長老たちから始めた。」

イエスは、天の聖所の贖罪所を離れて復讐の衣を身にまとい、神がお与えになった光に応じなかった者たちに対して、裁きとして御怒りを注ぎ出そうとしておられる。「悪いわざに対する刑が速やかに執行されないので、人の子らの心は思いきって悪を行うようになる。」主が彼らに対して示してこられた忍耐と長い寛容によって心が柔らかげられるどころか、神を恐れず真理を愛さない者たちは、その悪の歩みにおいて心をかたくなにする。しかし、神の寛容にも限度があり、多くの者がその境界を越えている。彼らは恵みの限界を踏み越えてしまったので、神は介入し、ご自身の名誉を守らなければならない。

アモリ人について主は言われた。「第四代に至って、彼らは再びここに戻って来る。アモリ人の罪はいまだ満ちていないからである。」この民は偶像崇拜と墮落のゆえに際立っていたが、その罪の杯はまだ満ち切っておらず、神は彼らをことごとく滅ぼすよ

う命じられなかった。人々が言い逃れの余地を残さないよう、神の力が顕著なかたちで現されるはずであった。憐れみ深い創造主は、第四代に至るまで彼らの罪を忍耐することをよしとされた。そのときになってもなお良い方向への変化が見られなければ、神の裁きが彼らに下ることになっていた。

寸分の狂いもない精確さで、無限なるお方は今なお、すべての国々に対して勘定をつけておられる。悔い改めへの呼びかけとともにその憐れみが差し伸べられている間は、この勘定は開いたままである。しかし、その数字が神の定めた一定の額に達すると、神の怒りの執行が始まる。勘定は締められる。神の忍耐は尽きる。彼らのために憐れみを嘆願することは、もはやない。

予言者は、世々を見渡し、彼の幻にこの時代が示された。

この時代の諸国民は、かつてない慈しみを受けてきた。天の祝福のうち最も選りすぐりのものが彼らに与えられたが、増し加わる高慢、貪欲、偶像礼拝、神への侮蔑、卑しい忘恩が彼らに対して記されている。彼らは神との清算を急速に迎えつつある。

しかし、私を震え上がらせるのは、最も大きな光と特権を与えられてきた者たちが、はびこる不義によって汚されてしまったという事実である。周囲の不義の者たちに影響されて、真理を告白する者でさえ多くが冷え込み、悪の強い潮流に押し流されている。真の敬虔と聖さに広く浴びせられる嘲りは、神と密接に結びついていない者たちから、神の律法への畏敬を奪う。もし彼らが光に歩み、心から真理に服しているなら、この聖なる律法は、このように侮られ退けられるときにこそ、彼らにはいっそう尊く思われるはずである。神の律法への軽蔑がいよいよ明白になるにつれて、それを守る者たちと世との間の境界線はいっそう鮮明になる。神の戒めへの愛は、ある者たちの間では増し加わり、別の者たちの間でそれらへの軽蔑が増すのに応じて高まっていく。

危機は目前に迫っている。急速に膨張する数値は、神の訪れの時がいよいよ来ようとしていることを示している。神は罰することを厭われるが、それでも罰し、それも速やかに。光のうちを歩む者は、近づく危険のしるしを見るだろう。しかし彼らは、神が訪れの日にご自分の民を守ってくださるという信念で自らを慰め、滅びを静かに、無関心のまま待ち受けて座してはならない。決してそうではない。彼らは、神の助けを強い信仰をもって仰ぎつつ、他の人々を救うためにたゆまず働くことが自分の務めであると悟るべきである。「義人の切なる祈りは大いに力がある。」

敬虔のパン種は、完全にその力を失ってはいない。教会に危機と落胆が最も深まるとき、光のうちに立つ小さな群れは、この地で行われている忌むべき行いのゆえに嘆き叫ぶであろう。だが、とりわけ彼らの祈りは教会のためにささげられる。というのも、その信徒たちが世のならいにならって行動しているからである。

この忠実な少数者の切なる祈りは、むなしくはならない。主が復讐者として出て来られる時、主はまた、信仰を純粋なままに保ち、この世から汚れのない者として自らを守ってきたすべての者の守り手としても来られる。まさにこの時、昼も夜も神に向かって叫び求めるご自分の選民のために、たとえ彼らに対して長く忍耐しておられるとはいえ、神は復讐すると約束しておられる。

命令はこうである。『都のただ中を、エルサレムのただ中を通り、その中で行われているすべての忌むべきことのゆえに嘆き、叫ぶ人々の額に印を付けよ。』このように嘆き、叫ぶ人々はいのちの言葉を語り伝えてきた。彼らは戒め、忠告し、懇願してきた。神を辱めていた者の中には、悔い改めて御前に心を低くした者もいた。しかし、主の栄光はイスラエルから去っていた。多くの者がなお宗教の形式を守り続けてはいたが、そこには主の力も臨在も欠けていた。『証言』第5巻、207-210頁。

エゼキエルによって示された封印の幻を正しく理解し、区分するためには、アドベンチズムの四世代を理解することが不可欠である。私たちが選んだ箇所、ホワイト夫人は冒頭でエゼキエル書9章に直接言及しており、その箇所は結びにもエゼキエル書9章への直接の言及で終わっている。その箇所では彼女はエゼキエルについてこう述べている。「預言者は時代を見通し、この時が彼の幻の前に示された。」エゼキエルは、十四万四千人の封印が行われている間に起こる出来事を見た。

前回の記事では、『予言の霊』の三つの具体的な箇所によって、イザヤの「エフライムの酔いどれ」が、この箇所では「古老たち」とされ、また両方の箇所でエルサレム（アドベンチズム）の指導者層を表していること、さらに、かつてのように神の力が力強く顕現することを彼らが見通せないことを明らかにした。この箇所では、彼らが見ようとしないうちにその神の力の顕現が、彼らにもたらされる神の裁きの一部として起こる。というのも、「人々は、弁解の余地がなくされるために、神の力が著しいしかたで現されるのを見ることになっていた」と述べられているからである。

ラオデキア的なアドベンチズムは、2001年9月11日に降り始めた「後の雨」の現れを見ようとしなが、終わりの日に「真夜中の叫び」のメッセージが繰り返されるとき、その雨の最高潮を目にするだろう。そのメッセージとは、第三の災いとしてのイスラムである。メシアを十字架につけたばかりの古代イスラエルの指導者たちも、ペンテコステに聖霊が注がれるのを見たではないか。

この箇所は教会を指しており、文脈上、エゼキエルはそれをエルサレムとして表している。また、教会（エルサレム）の成員の中には、他と対比される「小さな群れ」があり、その者たちは「光のうちを歩む者」であり「忠実な少数者」として示されている。聖書は「多くの者が招かれるが、選ばれる者は少ない」と教える。この箇所の主題には、神の民にもたらされる神の怒りが含まれている。人々は自らに裁きを招いたが、破壊の業を遂行するのは神の御使いたちであることを、神は明確に強調しておられる。神は決して偽らず、人間の咎を三代、四代にまで問うのはご自身であると約束しておられる。ゆえに、裁きの執行を神以外の誰かに帰することは、神の御性質を否定し、神を偽り者であるかのように示唆することになる。

その箇所は、エゼキエルの滅びの御使いたちがエルサレムを通り始めるとき、まさにそのときに「彼の怒りの働きが始まる」と示している。神の怒りは、彼の教会であるエルサレム、すなわちラオデキア的なアドベンチズムから始まる。

さばきが神の家から始まらなければならない時が来ています。もしそれがまず私たちから始まるのなら、神の福音に従わない者たちの終わりはどうなるのでしょうか。第一ペテロ 4:17

神の怒りは神の御使いたちによって遂行される。彼らの働きが始まる時、彼らは「撃て、目を惜しむな、憐れむな。老人も若者も、若い娘も、幼子も、女たちも、ことごとく殺せ。ただし、印のある者には近づくな。わたしの聖所から始めよ」と命じられる。神の怒りは聖なる御使いたちによって執行される。そして、ここで私たちが指摘したいのは、神の怒りの働きは第四の代に始まるという点である。

次回の記事でこの研究を続けます。

主のいけにえの日に、わたしは君侯たちと王の子ら、また異国の衣を身にまとうすべての者を罰する。同じ日に、敷居を飛び越え、主君たちの家を暴虐と欺きで満たす者をみな罰する。主は言われる。その日には、魚門から叫びの聲が起こり、第二の区から嘆きが聞こえ、丘々から大いなる破碎の響きがある。マクテシュの住民よ、泣き叫べ。商いする民はことごとく断たれ、銀を扱う者は皆、絶やされる。その時、わたしはともし火を持ってエルサレムを捜し、酒の澱の上に安んじている者どもを罰する。彼らは心のうちに言う、「主は良いこともせず、悪いこともしない」と。ゼパニヤ書  
1:8-12